ISSN 0027-9153

月報

国立国会図書館

特集　国立国会図書館と脚本・台本

脚本家 中園ミホさん インタビュー

放送番組制作の歴史をひもとく ―脚本・台本の紹介と利用案内

世界図書館紀行　ミャンマー

2014.11
No.644

国立国会図書館利用案内

東京本館

所　在　地　〒100-8924　東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号　03(3581)2331
利用案内　03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間　月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は 17:00までです。
資料請求受付★　月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。
即日複写受付　月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
後日郵送複写受付★　月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　利用者サービス部　サービス運営課　03(3581)2331　内線25211

関西館

所　在　地　〒619-0287　京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号　0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、
科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間　月～土曜日 10:00～18:00
資料請求受付★　月～土曜日 10:00～17:15
セルフ複写受付　月～土曜日 10:00～17:30
即日複写受付　月～土曜日 10:00～17:00
後日郵送複写受付★　月～土曜日 10:00～17:45
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　関西館　総務課　0774(98)1224［直通］

国際子ども図書館

所　在　地　〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
電話番号　03(3827)2053
利用案内　03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ　http://www.kodomo.go.jp/
利用できる人　どなたでも利用できます。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料　国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間　火～日曜日 9:30～17:00　※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。
第一・第二資料室の利用時間　閲覧時間　火～土曜日 9:30～17:00　資料請求受付　火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間　即日複写受付　火～日曜日 10:00～16:00　後日郵送複写受付　火～日曜日 10:00～16:30
複写製品引渡し　火～日曜日 10:30～12:00　13:00～16:30

■見学のお申込み／国立国会図書館　国際子ども図書館　03(3827)2053［代表］

11 November

CONTENTS

02 日本イメージの伝達　長谷川武次郎の挿絵本
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

特集　国立国会図書館と脚本・台本

04 脚本・台本の収集について

06 脚本家　中園ミホさんインタビュー

12 放送番組制作の歴史をひもとく―脚本・台本の紹介と利用案内

16 「市川森一の世界」を残し、伝える。―デジタル脚本アーカイブズとWARP―

19 国立国会図書館東京本館を見学しよう

22 世界図書館紀行　ミャンマー

18 館内スコープ
書庫の空調管理

30 TOPIC
○東日本大震災で被災した古文書「吉田家文書」の修復が終了しました

32 本屋にない本
○『外国映画に愛をこめて　外配協の50年』

33 お知らせ
○平成26年度東日本大震災アーカイブシンポジウム「4年目の震災アーカイブの現状と今後の未来（世界）へ繋ぐために」
○平成26年度アジア情報研修
○平成26年度法令・議会・官庁資料研修
○年末年始のご利用について
○新刊案内　国立国会図書館の編集・刊行物

今月の一冊 November

国立国会図書館の蔵書から

日本イメージの伝達　長谷川武次郎の挿絵本

大塚　奈奈絵

エミール・ヴェルハーレン(Emile Verhaeren)というベルギーの詩人をご存知でしょうか。現代の日本では研究者以外にはあまり知られていませんが、明治38（1905）年に出版された上田敏の『海潮音』で「ボドレエルにほのめき、ゼルレイヌに現はれたる詩風はこゝに至りて、終に象徴詩の新體を成したり」と紹介されたヴェルハーレンの象徴詩は、与謝野鉄幹や高村光太郎らの近代詩に大きな影響を与えました。ヴェルハーレンの日本への紹介は前述したように『海潮音』でしたが、欧米では、それに先立ち、明治29（1896）年の刊記を持つ、ヴェルハーレンの原詩を付した鈴木華邨の木版挿絵本*Images Japonaises*の存在が知られていました。これについては、大正元（1912）年にパリ郊外にヴェルハーレンを訪ねた与謝野鉄幹が、浮世絵、中でも春信を好むというヴェルハーレンから「先年日本の書肆の希望に任せて小さな一書を東京で出版した事がある」と聞かされて「予等に取って初耳であった」[1]と記しているのですが、この本自体、日本では最近までほとんど知られていませんでした。これは、*Images Japonaises*が元々海外向けの出版物であったこと、この本を所蔵している国内の図書館がわずかだったためだと思われます。

比較的最近の研究で、*Images Japonaises*はちりめん本を出版した長谷川武次郎が1900年のパリ万博に出品するために、すでに存在していた木版画集をヴェルハーレンに送って詩作を依頼したのであろうこと、正確な刊行年はおそらく1900年であることが分かってきました。さらに、この本に使われている木版画はともに明治29（1896）年に出版された英語の詩画集*The smiling book*と*Glimpses of Japan*と全く同じものであることも指摘されています[2]。

*Images Japonaises*は好評を博して版を重ねたらしく、図柄の異なる版が存在します。また富士山を背景に、着物姿の女性を乗せた人力車が湖畔の道を走る表紙の絵は、海外での日本のイメージとして定着していたらしく、同じ図柄は横浜写真[3]の蒔絵アルバムの表紙にも使われています。

当館は、*The smiling book*を帝国図書館の旧蔵書の1冊として所蔵していましたが、平成23年度に*Images Japonaises*を、平成25年度に*Glimpses of Japan*を購入により収集し、現在ではこの3冊全てを所蔵しています。このうち*Images Japonaises*と*Glimpses of Japan*は、錦絵に使われて欧米で評判の高かった奉書紙を使った大型の木版挿絵本ですが、*The smiling book*は一回り小さなちりめん本です。

これら3冊の本の挿絵に添えられた詩の内容はおのおの異なっていて興味深く、また、*The smiling book*の異版の下絵も長谷川武次郎の子孫の許に残されていますので、これらについても稿を改めて紹介する予定です。

（おおつか　ななえ　総務部司書監）

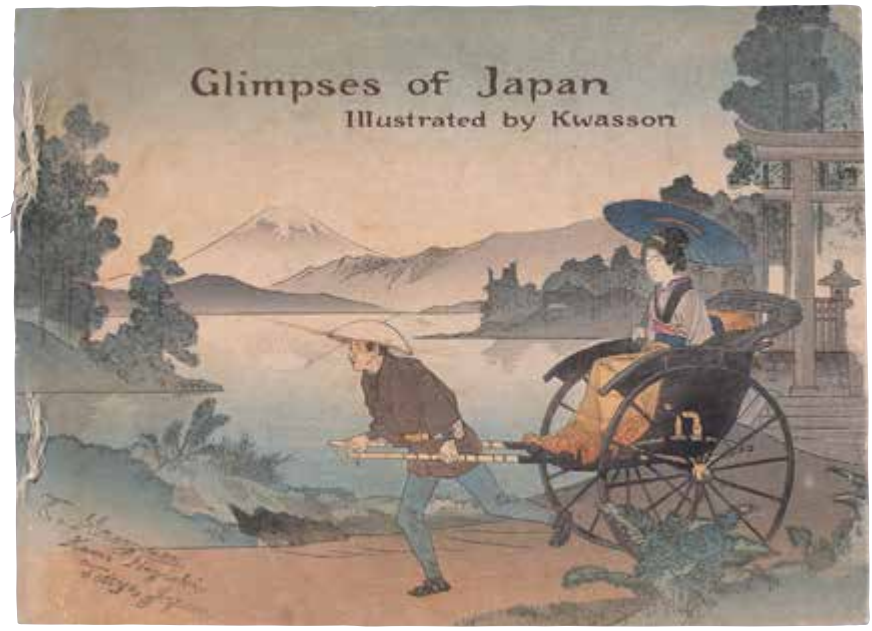
1　与謝野寛，与謝野晶子 著『巴里より』金尾文淵 大正3 p.459 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/951380

2　大場恒明「エミール・ヴェルハーレンのImages Japonaisesをめぐって」『神奈川大学国際経営論集』（16/17） 1999.3 pp. 85-106 http://klibredb.lib.kanagawa-u.ac.jp/dspace/bitstream/10487/4073/1/kana-14-16-17-0007.pdf 村松定史「異文化交流のひとこま　ヴェルハーレンと縮緬本」『東京成徳大学研究紀要』(8) 2001.6 pp.41-54 http://www.tsu.ac.jp/bulletin/bulletin/pdf/08/P041-054.pdf

3　幕末から明治にかけて、横浜では、離日する外国人向けの土産として高価な写真アルバムが製作され、輸出もされた。現代では「横浜写真」とよばれるこれらのアルバムの中には、豪華な蒔絵や螺鈿細工を施した漆塗りの表紙をつけ、絵師によって細密に彩色されたものが残されている（右頁写真）。

Images japonaises
illustrations de Kwasson ;
texte de Emile Verhaeren
T.Hasegawa　1896.5（刊記による）
1 冊　21 × 29cm
＜請求記号　W193-B1 ＞

Glimpses of Japan
illustrated by Kwasson
T. Hasegawa　1896.5　1 冊　21 × 28cm
＜請求記号　W166-B3 ＞



The smiling book
Edited by Takeziro Hasegawa
T.Hasegawa　1896　26p　17 × 22cm
＜請求記号　B-248 ＞
※マイクロフィッシュでの閲覧となります。

[漆塗り蒔絵アルバム表紙]
（放送大学附属図書館所蔵）

特集 国立国会図書館と脚本・台本

国立国会図書館では、平成26年4月17日より、日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアムから寄贈を受けた約27,000点の脚本・台本の提供を開始しました。

本号では、この新しい資料群について特集します。

脚本・台本の収集について

ラジオの放送が開始されたのは大正14（1925）年、テレビの放送が開始されたのは昭和28（1953）年のことです。以来、ラジオとテレビは私たちの日常生活には欠くことのできないメディアとして、膨大な数の番組が製作・放映されてきました。その中には、「番組が始まる時間になると、銭湯の女湯から人が消える」と言われたラジオドラマ「君の名は」をはじめとして、数々の流行や社会現象を生んだ番組が多くあります。

けれども、これらの番組は一過性のものとして制作されたため、現代まで録音や映像などの記録が残っている番組はほんのわずかです。特に、業務用のテープが高価であったため、何度も上書きして再利用されていた1980年代以前のテレビ作品の映像記録はほとんど残っていないと言われています。脚本家や制作者の手許に残っている脚本や台本も、古いものは40～50年を経て、散逸と劣化が心配されていました。

日本放送作家協会による脚本・台本の収集

このような状況を憂いた日本放送作家協会の故市川森一理事長の呼びかけで、日本放送作家協会の「日本脚本アーカイブズ特別委員会」が活動を開始したのは平成17年10月のことです。同委員会は、文化庁の助成と足立区からの施設提供を受け、脚本・台本の収集活動を続けるとともに、脚本展やシンポジウムを開催し、東京大学大学院情報学環との共同研究も進めてきました。

文化庁と当館の協定締結（平成23年度）

これらの活動を背景として、平成23年5月18日に文化庁と当館の間に結ばれた「我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承に関する協定」では、次世代へ確実に継承すべき我が国の貴重な資料の一つとして「テレビ・ラジオ番組の脚本・台本」があげられ、当館がその保存方法の調査研究等に参加することとなりました。この協定を受けて、同年7月には、日本放送作家協会、日本脚本

家連盟等に加えて、日本放送協会（NHK）、日本民間放送連盟のほか、放送人の会、放送番組センター、東京大学大学院情報学環等で構成された検討体である「脚本アーカイブズ推進コンソーシアム」が設立され、当館もこれに加わりました。

そして、平成23年度の検討の結果、放送の脚本・台本の収集・保存については、放送局での映像や録音の保存状況を勘案した上で、第1期（1980年以前）、第2期（1981～2000年）、第3期（2001年以降）の3つの年代に分けてアーカイブ化の優先順位を考えること、さらに、劣化の心配される第1期の資料群の寄贈を優先することが了承されました[1]。

脚本・台本の保存・公開への動き（平成24年度）

この検討体は、平成24年度以降は「脚本アーカイブズ検討委員会」と名称を変えて継続され、また、メンバーに、放送関係団体の代表等に加え、博物館等の職員も参加して、現存するラジオ・テレビの脚本・台本の数量や所在情報の把握、保存方法等に関する検討を重ねました。さらに、将来は脚本・台本が一般の方々へ公開されることを前提に、著作権等についての検討も行われ、脚本の寄贈者への説明や、著作者と所有者である放送局への報告を行いました。

一方、脚本・台本の収集活動を続けてきた日本放送作家協会日本脚本アーカイブズ特別委員会は平成23年度末に解散し、収集された約5万点のテレビやラジオの脚本・台本は、平成24年6月に新たに設立された「一般社団法人日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム」に引き継がれました。長期的な保存施設を確保できなかったため、収集した脚本・台本を将来的に利用提供ができる状態にすることが最も大きな課題とされました。

当館における脚本・台本の受入（平成25年度）

国立国会図書館はこれまで、ラジオ・テレビの脚本・台本については、図書や雑誌として刊行されたもの以外は収集の対象とはしていませんでした。これは、当館が収集する「出版物」が頒布を目的として相当部数作成された資料であるのに対して、放送の脚本・台本が、テレビやラジオの番組を制作する目的で作られ、制作関係者によって限定的に使用されてきたことによります。

当館がこれまで収集の対象としてこなかった脚本・台本を受け入れるに当たっては、利用提供の体制等を検討する必要がありました。加えて当館の書庫は数年後には満架が予想される厳しい状況にあります。これらの状況等を勘案して、放送局での番組映像・録音の保存が極めて少なく、劣化が懸念される第1期（1980年以前）の脚本・台本27,219点を、受け入れることが決まりました。また、第2期以降の脚本・台本は川崎市市民ミュージアムが、さらに、手書き脚本・台本の一部はNHK放送博物館、演劇関係脚本は早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、映画関係脚本は東京国立近代美術館フィルムセンターが受け入れて、分散保存することになりました。

当館への脚本・台本のご寄贈とその利用提供につきまして、多くの関係者の皆さまにご協力をいただきました。この場を借りて深く感謝いたします。

（総務部司書監　大塚奈奈絵）

1　『日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書7（平成23年度（最終版））』日本放送作家協会日本脚本アーカイブズ特別委員会, 2012.3

脚本家
中園ミホさん インタビュー

「ハケンの品格」「Doctor-X ～外科医・大門未知子～」など数多くのテレビドラマの脚本を執筆されている中園ミホさんをお迎えし、国立国会図書館との意外な関わりや、NHK 連続テレビ小説「花子とアン」の脚本執筆の過程で、どのような文献調査をされていたのかなどについて伺いました。

脚本が収められている書庫や、直筆の脚本などを見学した中園さんは、何やら思うところがあるご様子です……。

（聞き手：総務部司書監 大塚奈奈絵、編集：総務部総務課）

国立国会図書館で脚本修行 ―動機は失恋！？

―まず最初に、中園さんが脚本家になられた経緯をお話しいただけますでしょうか。

中園：正直に言いますと、20 代半ばぐらいの時に、ある脚本家に恋をして、大失恋をして、脚本家になればもう一度その人に会えるかなと思って。動機は失恋です。

―失恋ですか？？　学校に通われたとか、そういうことではなくて。

中園：広告代理店で 1 年 3 か月だけ OL 生活をしていたのですが、そこにシナリオ学校に通っている男性の同僚がいたんです。その人はとっても忙しくて、私が代わりにノートをとりに学校にもぐりこんで、ある日先生に、「君、『まさるさん』じゃないよね」って言われて（笑）。実は同僚の代わりにノートを取りに来ていますと言ったら、「じゃあ、君も脚本を書いてきたら、まあ、いる分にはいいよ」と寛容にも言って下さいました。それで、脚本を書いたんですよ。そうしたら、その先生がすごくほめてくれて。それは本当に大きいきっかけですね。励みになりました。でもなまけものなので、そのあと脚本を書き続けようという気持ちはなくて、ひたすらノートを取って、その帰りに先生たちとお酒を飲みに行って卒業、みたいな感じでした。

一目惚れした脚本家は、その学校の先生の知り合いでした。その方が執筆のため缶詰にされているホテルに押し掛けていたのですが、ある日、つきまとうなと言われてしまって、もう会ってはいけないんだ……と渋谷のホームに座って途方にくれていました。何台

か電車をやり過ごした後に、ああそうだ、あの人と同じ仕事につけばまた会えるな、と思ってしまったんです。今考えると迷惑な話ですが……。その次の日から、本当に嘘みたいな話ですが、ここの国立国会図書館に通うんです。

―どうして国立国会図書館に？

中園：その方の脚本を全部読もうと思ったんです。それで、脚本リストが載っている雑誌をまず探して、それを１冊１冊、映画雑誌なんかに脚本が出ていないかなと、全部調べてまわりました。だから、ここのカウンターには、本当にお世話になりました。最初は、コピーしてもらっていたのですが、コピー代も馬鹿にならず、破産しちゃうなと思って、途中からは全部書き写していました。朝やってきて、お弁当持ってきてお昼を食べて、戻ってきてまた書き写す、という毎日。でも、コピー代がなかったのが幸いして、書き写すとやっぱりすごく頭に入るんです。それが唯一の脚本修業です、私の。

国会図書館には１年ぐらい通いました。そういうときの女の人のエネルギーってすごいじゃないですか。早く会いたいから、早く脚本家になろうと思って。写し終わったとき、１年ぐらい経っていて、２年後には脚本家になっていたので、本当になんというか、そこの馬力だけは自分でほめてあげたいなと思います。

―その時に集中して手で書き写したのが、身になったのですね。

中園：そうなんです。写していると、脚本の構造みたいなものが分かってくるので、ただ読むよりは本当に勉強になったと思います。当時はコピー代が１枚30円くらいだったんじゃないでしょうか。しかも、コピーの紙が今みたいな紙ではなくて、感熱紙のような紙で。それで30円かけても消えていったり黒くなったりして、もうやりきれないので、結局コピーしたものも手で書き写しました。そのうち顔見知りのカウンターの女性もできて、また来たわね、といった感じのなんていうか、微笑みというか(笑)。勝手にこちらは、そういうふうに想像の翼を広げて、そう思っていましたけどね。こちらも逆に、カウンターにその人がいないと、あの女性は今日はどうしたのかなと思ったりもしました。

―どの雑誌にどの脚本が載っているかということはどのように調べたのですか？

中園：脚本リストは『映画芸術』に出ていました。あとはシナリオ誌ばかり扱う古本屋さんに行って、『月刊シナリオ』の中に掲載されているものを探して、何年の何月号というのをメモしてきて、また次の日、国会図書館に来て、借りて……。いやあ、今自分で言ってて感心します。今それだけ一生懸命やればもっといい脚本を書けそうな気がします(笑)。

中園流取材　人とはお酒を 文献は図書館で

―中園さんは、脚本執筆の際に徹底して取材されると伺っているのですが、文献の取材もされますか。

国立国会図書館には一年ぐらい通いました。そういうときの女の人のエネルギーってすごいじゃないですか。

書庫で懐かしい脚本と対面

中園：私はお仕事ものドラマをよく書くのですけれど、そういうときは、その職業の人と徹底的にお酒を飲むことが多いですね。ヒロインならヒロインの人となりが、もうはっきりと輪郭が見えて、その人が頭の中で動き出すまでは書けないんです。今回（「花子とアン」）のような時代もののときは、本当は村岡花子さんともお会いして長々とお話をしたいところなんですけれど、さすがにお会いできないので、あとはもう資料を読みました。資料は、NHKが打合せのたびに紙袋一杯ぐらいくれました。国会図書館でコピーした資料もたくさんありましたよ。

—どういうところで資料を使っているのでしょうか？例えば「花子とアン」で。

中園：資料しか当時のことをうかがい知るところがないので、とにかく全部の資料に目を通しました。たとえば、大正時代のカフェについて書かれた資料を読むと、その当時の市井の人たちの暮らしが何となくわかるんです。最初はカフェのことが知りたかったので、NHKは必要な部分、ライスカレーがいくらとか、そういう部分だけコピーしてくださったんですけど、これはどうしても本が欲しいと思って、古い本を探して買いました。

富岡製糸工場の女性たちのことが書かれた手記のようなものもありました。おそらく国会図書館でコピーした古い雑誌だったと思いますけど、それは読んでいたら気持ちがすごく入っちゃって。本当に過酷ですから。女工さんたちの息遣いみたいなものがしみじみと伝わってきました。

それから村岡花子さんの手記にもありますが、戦時中に飼っていた犬を軍用犬として持っていかれているんですよ。それで軍用犬の資料を探してきてくださいとNHKの人にお願いしたら、見つけてくださいました。私、軍用犬ってみんな、兵隊さんのお手伝いをするものだとばかり思っていたらとんでもない、毛皮にされたり、食べられたりなんです。なんで家庭で飼われていた小さい犬が、そんなにいっぱい連れていかれたのかということは、資料を読んでよくわかりました。

それ以外でも、集合写真を見ると、村岡花子さんはいつも端っこにいる方なんですね。それがキャラクターを作るときに、すごく役に立ちました。写真に写るときの位置って、その人を表すと思うんです。

1枚だけ、女学校の生徒と一緒に写っている写真は真ん中にいらっしゃるのですけど、それ以外の写真は、みんな端っこのほうにいらして、微笑みをたたえています。（柳原）

花子とアン

NHK連続テレビ小説
第90シリーズ
平成26年3～9月放送
主演：吉高 由里子

連続テレビ小説 花子とアン 写真提供：NHK

「赤毛のアン」翻訳者・村岡花子の、明治・大正・昭和にわたる、波乱万丈の半生を描いたドラマ。初回（3月31日放送）から最終回までの期間平均視聴率が22.6％を記録。NHK連続テレビ小説では過去10年で最高の記録となった。（関東地区、ビデオリサーチ調べ）

白蓮とか片山広子とか、林芙美子とか、強烈な個性のインテリな女性のなかで、にこにこして微笑んでいたタイプの人じゃないのかなって感じました。そういうことは写真の資料を通して、お人柄の輪郭がとてもはっきりしてきます。

脚本アーカイブズは必要ない?!

—国立国会図書館が1980年以前のテレビやラジオの脚本の提供を始めました。脚本アーカイブズについてお考えをお聞かせください。

中園：正直に言いますと、アーカイブズって、以前はあまり必要性を感じてなかったんです。それで市川（森一）先生と喧嘩したこともありまして。

尊敬する向田邦子さんが、放送というのはパッと消える美学だ、だから台本も全部捨ててしまう、と言うのを聞いて、すごく格好いいなと思い、真似をしたことがあるんです。家も狭いし捨ててしまおうと思って、脚本をマンションのゴミ集積場に持っていったんです。ですが、夜になってから、「あとで読みたくなるかも」とか「書けないときにちょっと開いて自信を取り戻したりするかも」とか後悔して、すごく格好悪いのですけど、ゴミ集積場に束ねて置いたのをもう一回取り戻しに行きました（笑）。その時にますます私、向田さんって本当に生き方として格好いいなあと思いましたね。

そういうなかで市川先生にアーカイブズの話を伺ったので、放送の仕事に携わる以上は未来を見ていったほうがいいんです、とか生意気に言ってしまいました。市川先生は本当に貴重な文化の記録なのだということをおっしゃっていたのですが、お酒に酔っていたこともあり、生意気にも反論をしていました。

でもよく考えてみたら、自分の脚本修業って全部、先ほどお話ししたように出版された脚本を読む、それだけだったんです。それに、そのとき出版されていなかった台本も、本当は読みたくて仕方がない。今日、書庫を見ているときに、それがぱーっと頭をよぎりましたね。実は何冊もあるんです、今でも読みたいけれど映像も残っていないようなものが。それを、もう1回勉強できるかなとか、書庫を歩いているときに急にそういう気持ちになって、ほんと「市川先生、ごめんなさい」と思いました。

それからやっぱり、胸が熱くなりますね、あの書庫にもしかしたら自分の本が100年先にも残るかも…と想像すると。明日の朝が締切りだからという、時間との必死の闘いのなかで書き飛ばしてしまった脚本が、100年後にたまたま日本のテレビドラマについて調べてみようかなんて思った人が、開いてくれたりするのかなと思うと、それはなんだか感動がありますね。

—DVDを借りるのと同じように、脚本をテキストで読みたいという人もいるのではないでしょうか。私たち保存する側からすると、脚本の保存の重要性があまり理論化されていな

直筆の貴重な原稿も

ゴミ集積場に束ねて置いた脚本を
もう一回取り戻しに行きました（笑）

「花子とアン」でもそうですけど、カットされたシーンはDVDにも残らないのです。

かったり、重要だという考え方があまりはっきり出ていないように感じます。

中園：映像じゃなくて脚本で読みたいというのは、脚本家を目指してる人間だったら本当にみんなそうだと思います。映像の元となる文章を書くのは、特異な作業ですし、例えば私は市川森一先生の大ファンですけど、市川森一先生のト書きを結構参考にしているんです。映像だけでは得られないものですよね。逆に映像好きな人は、この台本がこんなふうになってしまうのか…みたいなことも知りたいのじゃないでしょうか。脚本は映像の青図だと思います。

いろいろな事情で脚本と結末が違っているものなどもあるので、あの脚本だけは絶対残してもらおうと思うものもあります。私、いつも少し台本を長く書きすぎてしまうんですね。「花子とアン」でもそうですけど、カットされているシーンは沢山あります。たとえば、花子が、女学校の図書室にあった全ての本を読み尽くしてしまうのですが、そのシーンは脚本には書いたけれど、映像では尺の問題でなくなっていました。それはDVDにも残らないので、台本があれば、証拠としても残りますものね。

脚本家の数だけ、ドラマがあっていい—テレビドラマの脚本を書くこととは？

—少し話を変えまして、テレビのドラマを作るということについて、中園さんがどんなふうに考えていらっしゃるかをお聞かせいただけますか？

中園：脚本家の数だけ、いろんなドラマがあっていいと私は思っています。私にとっては、働く女の人を応援するようなものを書くのが好きだし、これからも書いていきたいと思います。派遣社員であろうが、外科医であろうが、やっぱり今でも男社会なんですね。男の人の中で、女の人が働いていくということは、愚痴も出るし、不満や、許せないこともたくさんあるので、それをヒロインに代弁させたいと思っています。でも、「ハケンの品格」では、派遣社員を雇っているおじさんたちが勉強のために見て下さったりとか、思わぬところで男性の視聴者が見てくれたりしました。意外だったのが、「Doctor-X」も年配の男性たちがよく見てくれているんです。なぜだろうって気になって聞いてみたら、やっぱりサラリーマン社会で、中間管理職など、上にものを言えないというストレスはみんなあるから、あの大門未知子のように言ってのけられたら、どんなに気持ちがいいだろうと思って

ハケンの品格

日本テレビ系列　2007年1～3月
主演：篠原 涼子

特Aランクの評価を受けるスーパー派遣社員大前春子が、食品会社のマーケティング課で3ヶ月契約で働く姿を描く。

Doctor-X 外科医・大門未知子

テレビ朝日系列
第1期　2012年10月～12月
第2期　2013年10月～12月
第3期　2014年10月～（放送中）
主演：米倉 涼子

天才的な腕を持ちながら、特定の病院や医局に属さない、フリーランスの女性外科医大門未知子の活躍を描く。

見て下さるらしいのです。それはそれで、本当に嬉しかったですけどね。

―脚本家に必要なものは何ですか？

中園：脚本家によって違うと思いますが、私はまず、「ハケンの品格」だったら「今、派遣社員の辛さや苦しみを描かなければ!!」という使命感のような、熱意のような、そこからスタートしたので、そういう作品の根幹となった感情はやっぱりどうしても譲れないものです。

懸賞の脚本を読ませていただくと、器用に上手く書けているものは多いです。情報がすごくいっぱいあるからだと思うんですけど、以前は、取材するにはまず図書館行かなきゃとか、いろいろ、自分の体を使わなければいけなかったのに、今はインターネットでパッと調べてパッパッと書ける。脚本の形式も皆さんよくご存じで、器用に書いてあるんです。けれども、作者として言いたいことが何もない、というものが結構多いような気がするんです。

テクニックに走らないで、どんなドラマを自分がつくりたいのか、あと何が書きたいのか、そこを大事にして、もっと掘り下げてほしいし、やはり体を使って取材してほしいと思いますね。インターネットだけに頼らないで。

―中園さんは今後も、働く女の人の背中を押すような、そういう脚本をずっと書き続けられるのですか。

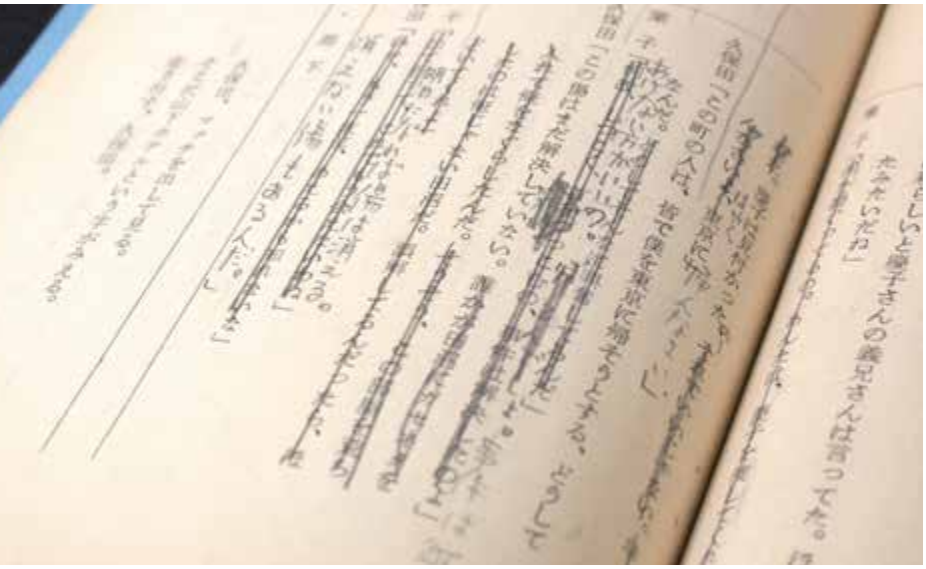
中園：書き続けたいと思っています。そこは、私のライフワークでしょうか。それから、私はずっと現代のドラマを書きたかったのですが、「花子とアン」を書いたことで少し変わってきました。時代ものを書いても、今の人たちに向かって応援とか、そういうことはできるんだなと思うようになったので、また時代ものにも挑戦してみたいなと。そのときはまた国会図書館にお世話になると思います。

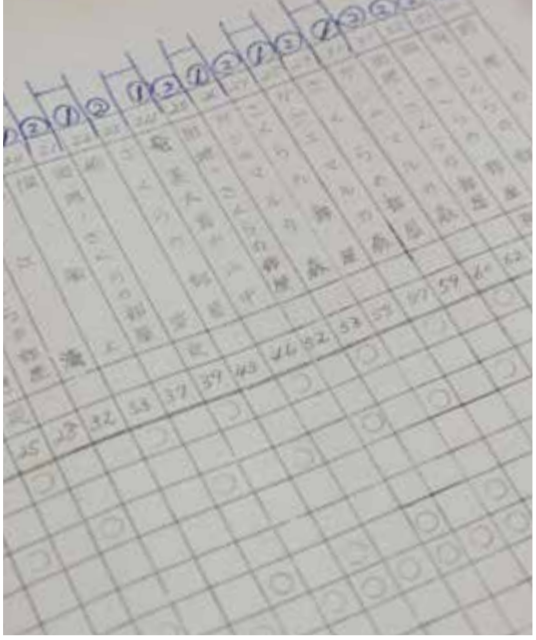
―国立国会図書館を役立てていただき嬉しく思います。本日はありがとうございました。

注 当館は1980年以前の脚本・台本を所蔵しています。中園氏の脚本の所蔵機関は、「脚本データベース」（本誌p.13参照）で検索できます。

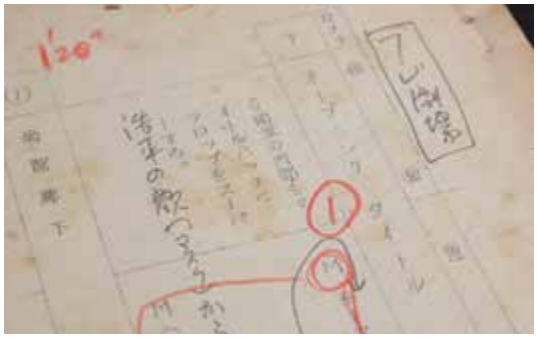
中園 ミホ

1959年東京生まれ。日本大学芸術学部卒業後、広告代理店勤務、コピーライター、占い師の職業を経て、88年にテレビドラマ「ニュータウン仮分署」で脚本家としてデビュー。その後も「不機嫌な果実」「やまとなでしこ」「スタアの恋」「anego」など、テレビドラマを中心に数多くの作品を執筆する。07年に「ハケンの品格」が放送文化基金賞と橋田賞を受賞。そして、13年には「はつ恋」「Doctor-X 外科医・大門未知子」で向田邦子賞と橋田賞をダブル受賞。また、近年は「東京タワー」等の映画脚本のほか、エッセイ執筆も手掛けるなど活動の幅を広げている。2010年からは、日本大学芸術学部の客員教授も務める。

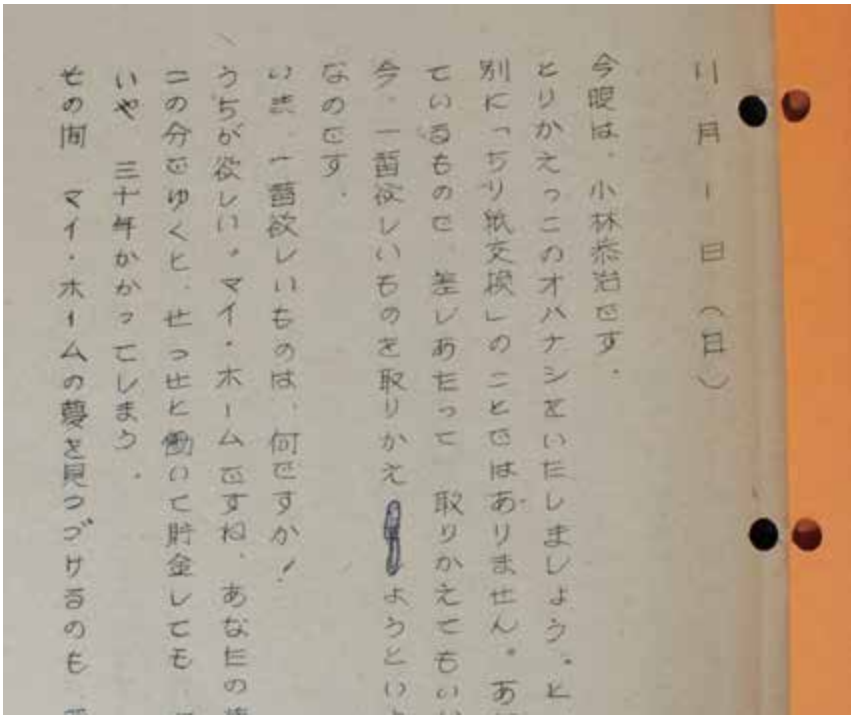




放送番組制作の歴史をひもとく
―脚本・台本の紹介と利用案内



国立国会図書館では、平成26年4月17日から、日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム（以下、コンソーシアム）から寄贈された脚本・台本約27,000冊の提供を始めました[1]。この稿では、それらの脚本の探し方、利用の仕方、脚本ならではの資料の魅力などをご紹介します。



脚本を探すには

閲覧したい脚本が国立国会図書館にあるかどうかを調べるには2つの方法があります。

1つは、コンソーシアムが提供している「脚本データベース」[2]を検索する方法です。このデータベースではコンソーシアムが当館を含め6機関[3]に寄贈あるいは寄託した約41,700点の脚本・台本を一括して検索することができます。タイトル、作者、出演者、所蔵機関などで検索できるほか、年代やジャンルでの絞り込みも可能です。国立国会図書館に寄贈されたのは、1980年以前のラジオ・テレビの放送台本・脚本ですが、「脚本データベース」には他機関に寄贈された1981年以降のラジオ・テレビや演劇、映画、アニメなどの台本のデータも収録されていて、どの機関が所蔵しているかがわかります。ただし、平成26年10月現在、国立国会図書館以外の各機関においては公開に向けて準備中で、まだ利用できません。

もう1つは、「リサーチ・ナビ」[4]に掲載した当館所蔵の脚本資料一覧リストから探す方法です。タイトル順のPDFファイルと管理番号順のCSVファイルを提供していますのでご活用ください[5]。

1 国立国会図書館では「脚本」と「台本」について特に区別せず保存、提供しています。
2 http://db.nkac.or.jp/
3 当館以外の所蔵機関は、川崎市市民ミュージアム（1981年以降の放送脚本・資料）、東京国立近代美術館フィルムセンター（映画シナリオ・資料）、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館（演劇・イベントの脚本・資料）、NHK放送博物館（脚本の自筆原稿等）、日本動画協会（アニメの脚本・資料・グッズ）
4 http://rnavi.ndl.go.jp/avmaterial/entry/kyakuhon.php
5 CSVファイルには、シリーズ名や出演者などPDF版には収録していない項目も含まれています。

資料紹介

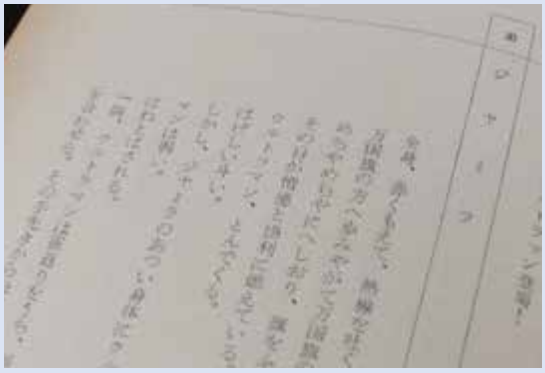
所蔵資料の中からいくつか興味深い脚本・台本をご紹介します。

放送日 / 作家 / 放送局 【 】内は管理番号 （敬称略）

「執刀」 （未放送）/ 山本雪夫 / フジテレビ【N01-45189】

フジテレビが、開局した昭和34（1959）年に試験放送のために制作したドラマの脚本です。関係者以外は誰も見ない試験放送にもかかわらず、医師がドイツ語で会話するセリフにその場で字幕スーパーを入れるという熱のこもった作品だったとのことです*。当館には、その字幕の手書きのテロップも一緒に寄贈されました。

*『日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書 6（平成22年度）』日本放送作家協会日本脚本アーカイブズ特別委員会，2011.3



「ウルトラマン」22　故郷は地球－棲星怪獣ジャミラ登場

（放送日不明）/ 佐々木守 / TBS【N01-51079】

昭和41（1966）年に放送が開始されたウルトラマンシリーズの中から怪獣ジャミラが登場する回です。脚本はウルトラマンシリーズや数々のテレビドラマを担当した佐々木守、演出は映画監督やオペラ演出家としても知られる実相寺昭雄（じっそうじ）が担当しました。

脚本を利用するには

脚本をご利用いただけるのは、東京本館新館1階の音楽・映像資料室です[6]。脚本の書誌データはNDL-OPACには収録されていないため、先にご紹介した「脚本データベース」やリサーチ・ナビ掲載のPDFリストでタイトルと管理番号を調べて、音楽・映像資料室備付けの請求票をカウンター職員に提出してください。1回の請求で3点まで、1日何回でもご請求いただけます。脚本は録音・映像資料と同じように、調査研究目的の場合に限りご利用いただけます。「閲覧許可申請書」に調査目的や研究テーマ等を記入して請求票と一緒に提出してください。

6 同資料室の利用方法については、当館HPの専門室・閲覧室案内（http://www.ndl.go.jp/jp/service/tokyo/music/index.html）をご参照ください。開室時間は、平日・土曜日ともに9:30-17:00、資料請求受付時間は9:30-16:00です。

脚本・台本の種類と特徴

脚本・台本と一口に言っても、ラジオかテレビか、ドラマの脚本か、バラエティや歌番組のための構成台本かなど様々です。当館所蔵の脚本の内訳は下の表のとおりです。大部分は印刷・製本されてスタッフや出演者に配布された脚本ですが、脚本家の原稿や企画段階の資料なども若干含まれています。

脚本・台本は制作が進むにつれて何度も改訂されていきます。1つのドラマの同一回の台本でも、準備稿と決定稿など違うバージョ

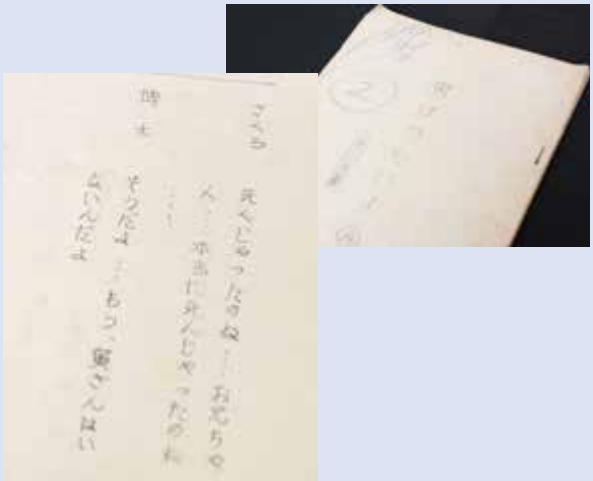
	ドラマ	構成*	人形劇*	その他	計（冊）
テレビ	13,377	6,424	451	104	20,356
ラジオ	3,018	3,559	0	4	6,581
資料等					282

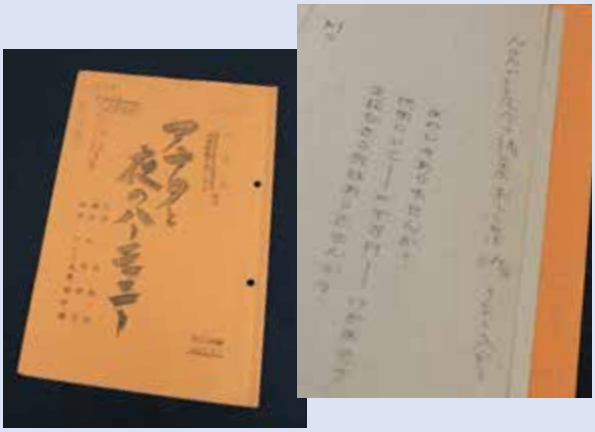
*構成：バラエティ、歌謡番組等の構成台本。
人形劇：子ども向け人形劇の台本。

「男はつらいよ」26

(1969/3/27) / 山田洋次 / フジテレビ【N01-11213】

山田洋次監督の国民的人気映画シリーズですが、実は昭和44（1969）年8月公開の映画第1作の前に、テレビの連続ドラマとして制作、放映されました（昭和43～44年、計26回）。主人公の寅さんがハブにかまれて死んでしまうという結末に視聴者からの抗議が殺到し、映画化につながりました。原案・脚本は映画と同じく山田洋次がメインで手がけ、主演は渥美清、妹さくらは長山藍子が演じていました。





「アナタと夜のハーモニー」

1970～71 / 向田邦子他 / JORF（ラジオ日本）【N01-23995他】

昭和45～46（1970～71）年に放送された一人語りのラジオエッセイで、向田邦子が構成台本の多くを手がけました。向田作品は多くが活字化されていますが、この番組の台本は刊行されておらず、貴重な資料です。

ンの台本を所蔵しているものもあります。見比べてみるのも面白いでしょう。

また、脚本には脚本家が書いたセリフやト書き以外にも、制作に関する様々な情報が収録されています。配役や制作スタッフの名前はもちろんですが、制作日程やシーンごとの出演者の出番を示した表が印刷されているものも多く、セットの図面などが添付されている資料もあります。

中には元の所蔵者である演出家や出演者の書き込みが入ったものもあります。セリフが削られたり変えられたり、演出家の指示が入っていたり、番組制作の現場の息遣いが伝わってきます。

4月の提供開始以降、脚本家や構成作家を目指す方や、俳優やテレビ作品の調査をしている方などに少しずつ利用されはじめています。日本の放送番組制作の歴史をひもとく一次資料である、これらの脚本が長く活用されるように大切に保存し、多くの方に利用していただけるよう努めていきたいと思います。

（利用者サービス部音楽映像資料課）

「傷だらけの天使」1

（放送日不明）/ 市川森一 / 日本テレビ【N01-26621】

昭和49～50（1974～75）年にかけて放送され、主演の萩原健一と水谷豊のコンビで一世を風靡したアクションドラマです。市川森一がメインライターを務めました。表紙には「第1回　盗難車調査報告書（仮題）」と記されていますが、実際には「自動車泥棒にラブソングを」と改題されて、第7回として放送されました。

「七人の刑事」17　サマーガール

(1978/8/25) / 矢作俊彦 / TBS【N01-13069他】

昭和36（1961）年から放送され、その後何度も復活した長期にわたる人気刑事ドラマです。派手なアクションはありませんが、様々な社会問題を取り上げ、人間ドラマの魅力を引き出す脚本と制作姿勢が高い評価を受けました。映像が1話分しか残存していないため、脚本は作品を知る貴重な資料となっています。この回は昭和53（1978）年から放送された第3シーズンのもので、小説家の矢作俊彦が脚本を担当しました。準備稿、改訂稿、決定稿、MAV稿* の4つの版を所蔵しており、途中で場所やヒロインの名前、セリフなどが変わっています。

* 映像編集終了後、音楽や効果音などをつけて完成させるための、音声ダビング作業用台本。

「市川森一の世界」を残し、伝える。

―デジタル脚本アーカイブズとWARP―

国立国会図書館では、脚本・台本の保存・提供を行うとともに、日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム（以下、コンソーシアム）が進めるデジタル脚本アーカイブズのウェブサイトを「インターネット資料収集保存事業（WARP）」で収集し、保存しています。

WARP　http://warp.ndl.go.jp/

インターネット資料収集保存事業（WARP）

WARPとは、当館がインターネットにある国内のウェブサイトを収集し、そのデータを保存する事業です。平成14年から始まり、これまでの12年間で約7,600種のウェブサイトを合計76,000回以上収集しました。平成26年9月時点で、容量にして約430TBのデータを保存しています。

WARPの主な収集対象は、国の機関や地方公共団体、独立行政法人、国立大学など公的機関のウェブサイトです。その他に、私立大学、文化的・国際的イベントのサイト、東日本大震災に関するサイト、デジタル脚本アーカイブズなどのように文化的・学術的価値のあるサイトを中心に、民間サイトの収集にも力を入れています。

ウェブサイト「市川森一の世界」

『快獣ブースカ』、『ウルトラセブン』、『コメットさん』、『太陽にほえろ！』、『傷だらけの天使』、『前略おふくろ様』、『黄金の日々』、『山河燃ゆ』、『精霊流し』……多くの方が泣き、笑い、影響を受けた数々の作品。これら膨大な数の脚本を書いたのが、脚本家の故・市川森一氏です。

コンソーシアムは、デジタル脚本アーカイブズの最初の試みとして、平成24年にウェブサイト「市川森一の世界」を作り、インターネットで公開しました。

このウェブサイトには、次の3つのメニューがあります。

○「脚本を読む」

市川氏が執筆した脚本や関係した作品の年譜・リスト、市川氏直筆の創作メモやイラストを見ることができます。

また、平成24年12月から平成25年3月までは、デジタル化した『快獣ブースカ』等の脚本の中身を期間限定で読むこともできました。

○「市川森一の足跡」

市川氏のプロフィール、年譜、写真に加え、市川氏自身による「わたしと脚本」を語る音声、「月刊ドラマ」に掲載されたインタビュー

故・市川森一氏

「市川森一の世界」　http://ichikawa.nkac.or.jp/

記事などで、市川氏の業績を知ることができます。

○「関係者インタビュー」

放送評論家の鈴木嘉一氏の特別寄稿、プロデューサーの橋本洋二氏・近藤晋氏・堀川とんこう氏へのインタビューを読むことができます。あわせて、恩地日出夫氏、さだまさし氏、長坂秀佳氏、水谷豊氏、三谷幸喜氏、桃井かおり氏、渡辺克行 諫早市立諫早図書館長[1]など、親交のあった関係者50名から寄せられた追悼メッセージも掲載されており[2]、市川氏の生前の姿が浮かび上がってきます。

国立国会図書館で市川氏の脚本を読む

コンソーシアムのご協力のもと、脚本全文が掲載された「市川森一の世界」のウェブサイトをWARPで丸ごと収集・保存しました。

コンソーシアムが運営する「市川森一の世界」では、市川氏の脚本の公開期間は既に終了しており、インターネットで全文を読むことはできません。しかし、このウェブサイトはWARPで保存していますので、国立国会図書館に行けば、公開されていた市川氏の脚本の全文をコンピュータで閲覧することができます。

トップページから「脚本を読む」を選び、「全文読める！脚本リスト」を見ると、先に挙げた『快獣ブースカ』をはじめ、テレビドラマ、映画、舞台など懐かしい名作の脚本153件がPDFファイルで見られるようになっています。また、全文ファイルとともに、タイトル、放送日、放送局、時間枠、監督・演出、プロデューサー、出演者、主題歌などの詳細な書誌データも掲載されています。

WARPで残し、後世に伝える

紙に印刷された情報と違って、変化しやすく消えやすい特徴を持つウェブサイトは、ひとたび消えてしまったらアクセスすることは困難です。当館は、印刷出版物にとどまらず、電子的に流通する情報を含め、さまざまな資料・情報を文化的資産として収集し、保存することを目標に掲げています。

市川氏は、日本脚本アーカイブズの創設運動を進める際に、「遺すという考え方がないものは文化とは言えない」[3]と考えていました。「遺す」という言葉には、何かをとどめておくだけでなく、残すことによって後世に伝えるという意味もあります。それゆえ、WARPで「市川森一の世界」を収集し、保存できたことには、文化的に大きな意義があります。

こうした貴重なウェブサイトを文化的資産として「遺す」ために、今日もWARPはウェブサイトを集め続けています。

（関西館電子図書館課）

1　市川氏は長崎県諫早市生まれであり、平成13年7月には諫早市立諫早図書館の名誉館長となった。この図書館には、市川氏が実際に使っていた「市川森一シナリオルーム」がある。

2　追悼メッセージは横浜の放送ライブラリーで開催された「市川森一・上映展示会 ～夢の軌跡～」（平成24年12月6日 ～25年2月3日）展示用に寄せられたもの。

3　デジタル脚本アーカイブズ「市川森一の世界」プロフィールのページより。http://ichikawa.nkac.or.jp/contribution/profile/

「全文読める！脚本リスト」
（全文は国立国会図書館内でご覧になれます。）

『快獣ブースカ』4話の脚本表紙と色紙「ブースカイラスト」

市川森一氏から父親へのメッセージが書き込まれた脚本『ウルトラセブン』29話

書庫の空調管理

図書館にある機械設備と電気設備が問題なく運転・稼働すること。これが自分の仕事です。図書館らしくないと思われそうですが、図書館ならではの仕事もたくさんあるのです。

その一つが書庫の空調管理です。国立国会図書館の所蔵資料は約４千万点ですが、その多くは立入りが制限された書庫に収められています。資料を良い状態で保存するためには、書庫内の温度や湿度を大きく変化させないことが重要です。とはいえ、空調稼働に係る電力消費は大きく、節電も意識しなければなりませんので、そのあたりのバランス調整に気を使うところです。

毎年５月頃、外が暑くなると、書庫の温度も上がってきます。東京本館の書庫は、地下８階までの新館書庫が有名ですが、地上階にもあります。地上階の書庫のほうが外気からの影響を受けやすく、注意が必要です。資料保存の担当者と温湿度の記録データを見ながら、いつ、どのような設定で空調運転を始めるかを決めます。この頃に夏の長期予報が発表されますが、冷夏だったら少し安心します。

梅雨どきは湿度がぐんぐん上がります。それに伴って書庫の温湿度もだんだん上がってきます。お盆の前後、１年でいちばん暑い時期には、書庫の中で蒸し暑い空気がよどまないように、夜間に送風運転を行うこともあります。熱帯夜

が続かないように祈るような毎日です。

夏が終わるとほっとしますが、それもつかの間、今度は冬の寒さと乾いた空気がやってきます。お正月明けには、やはり地上の書庫から先に温湿度が下がってきます。夏季や閲覧室との温湿度差を考えて、節電に配慮しながら書庫内の温湿度が下がりすぎないように調節します。ですから冬は冬で気を使います。

また、書庫内外の環境、空調機、その他機器類の状況によって書庫の空気は動いています。陽圧といって、書庫から外に空気が流れるときは良いのですが、外の空気が流入するとき（陰圧といいます）は、温湿度が変化してしまいます。その時々に適した運転となるよう、機器の調整をこまめに行い、書庫内の環境維持に努めています。

図書館の大事な場所を守るため、今日も温湿度の記録データとにらめっこです。

（管理課施設運用係　空調の番人）

国立国会図書館
東京本館を見学しよう

国立国会図書館東京本館は、閲覧スペースと書庫の面積をあわせると約９万７千平方メートルの広さで、これは東京ドームの面積の約２倍にあたります。この大きな図書館を、年間約 3,800 人の方が見学に訪れます。

今回は、主に一般向けの参観について、申込方法と、実際の参観（見学）の流れについて説明します。ご協力いただいた富山県呉東図書館協会のみなさんと一緒に、館内を歩いてみましょう。

新館書庫地下４階のマイクロフィルム保存設備

新館書庫地下８階（光庭）

見学の申込みについて

見学は予約制で、受付は先着順です。３か月前から１か月前までに、電話でお問合せください。ご希望の日時や目的を伺います。グループの人数、目的によっては、専門室も含めたコースを試行中です。

図書館にお勤めの方、大学の司書課程で学んでいる方、図書館に関心がある方にもご好評いただいています。

詳細は、ホームページ「東京本館の参観（見学）について」をご覧ください。
http://www.ndl.go.jp/jp/service/tokyo/visit.html

その他、目的別に以下のようなメニューもあります。いずれも見学可能な曜日・時間、人数、申込方法等が異なります。

職場見学（高校生・中学生向け）

学校からのご依頼で、15 名までの職場見学に対応しています。見学希望日の２か月前の月の１日から予約を受け付けています。

修学旅行の班別行動で、国立国会図書館の職場見学がしたい！

英語によるガイドツアー

英語による説明も行っています。滞在期間が限られている外国の方は、参観希望日の１週間前まで、日本在住の外国の方は、２週間前までにお知らせください。

英語で国立国会図書館の説明をしてほしい。

利用ガイダンス

初めて国立国会図書館を利用する方向けに、利用者端末を操作して書庫内の資料を請求する方法などを説明します。毎月第２・４木曜日、１回につき５名程度で、予約不要です。なお、ガイダンス後、ご希望の方は新館書庫をご案内します。

国立国会図書館を利用したいけれど、よくわからない…

見学コース 誌上体験！

本館ホールのステンドグラス

まずは控え室にご案内、ここでビデオをご覧いただきます。国立国会図書館の役割は、国会の立法活動を補佐し、また、日本で唯一の国立図書館として、納本制度などで集めた資料を永く保存することです。見学では見られないこうした活動についても、映像で説明します。

見学者控え室

それではさっそく見学に出かけましょう。最初は本館ホールです。初めて来た方の中には、本棚が見当たらないことにびっくりする方もいるかもしれません。国立国会図書館は閉架式といって、ほとんどの資料は書庫にしまわれているのです。利用者登録をすることで、書庫内の資料が利用できます。

利用者端末

本館ホールと図書カウンター（右上）

書庫内の資料は、ホールにある端末で検索し、利用を申し込みます。本館・新館ともホール付近に検索をサポートするスタッフがいますので、困ったときにはお声掛けください。

図書カウンター

資料が書庫から出てきたら、図書の場合は、こちら図書カウンターで受け取ります。国立国会図書館の資料は、館内利用のみで、家に持ち帰ることはできません。このような閲覧室で資料をご覧になり、必要に応じて複写をお申し込みいただきます。

閲覧室

複写は、複写カウンターで資料をお預かりして、スタッフが複写作業を行います。「著作権法」に基づき、著作権者の権利を侵害しないように行っています。

科学技術・経済情報室

東京本館には、9つの専門室があります。専門室のスタッフは利用者の調べものの相談に乗り、適切な資料にたどりつくための手助けをしています（レファレンス・サービス）。

雑誌カウンター

新館にやってきました。こちらは雑誌カウンターです。申込みに応じて、雑誌はこのカウンターからお渡しします。

新館書庫地下1階から地下4階は主に雑誌のフロア

これから、普段関係者以外は入れない場所、新館地下の書庫に入りますが、その前に外の塵（ちり）などの持込みを防ぐため、靴カバーを装着していただきます。なお、スタッフは書庫用の内履きを着用しています。

地下8階に着きました。この吹き抜けは光庭（ひかりにわ）といって、天窓から外の光を取り込んでいます。地下8階にいるのに、まるで8階建ての1階にいるかのようですが、地下約30メートルの深さの場所です。

書庫では水色の靴カバーを着用

資料を地上まで送る搬送設備

地下に書庫を置くメリットは、地震の揺れや外気の影響が少ないことです。書庫内は、年間を通じて温湿度が大きく変動しないように調整しています。また万が一火災が起きた場合は、水ではなくガスで消火する仕組みがとられています。

光庭

地下1階まで上がってきました。地下4階から地下1階は、主に国内で刊行された雑誌が収蔵されています。これらも納本制度により、収集・保存されているものです。懐かしいマンガ雑誌の背表紙も見えます。

製本された古い新聞

マンガに限らず、雑誌は保存機関が少ないため、利用が多い資料です。つくりが簡単なものや紙質の悪いものがあり、劣化・破損しやすく、必要に応じて製本や補修を行います。後世に残すために、すべての資料をていねいに扱うようお願いしています。

電動の集密書架が並ぶ

新館書庫地下1階

控え室に戻って、これまでの疑問点などにお答えします。この日は、「利用者の年齢分布は?」「地元の子どもたちに国立国会図書館の仕事を紹介したいが、わかりやすいビデオなどはないか?」といったご質問がありました。以上で参観は終了となります。

（利用者サービス部サービス運営課）

民主化の道を歩み始め、「アジア最後のフロンティア」とも言われるミャンマー。豊富な天然資源に恵まれた農業国であり、日本の 1.4 倍の国土に約 5,200 万の人々が生活する。中国、タイ、ラオス、インド、バングラデシュの各国と国境を接し、民族の数が 100 を超える多民族国家でもある。

筆者は今年 2 月、ミャンマーの首都ネピドーで開催された ASEAN 図書館開発フォーラム「社会のための図書館」に出席し、その際ミャンマーを代表する 2 つの国立図書館と、2 つの大学図書館を訪問する機会を得た。ここでは、喧噪と活気に満ちたミャンマーの旧首都ヤンゴン、広大な敷地に建設された新首都ネピドーの様子とともに、各々の図書館をご紹介したい。

世界図書館紀行

ミャンマー

白井　京

ミャンマーについて

成田空港から直行便に乗り、約8時間後に到着するのがミャンマーの旧首都、ヤンゴンである。ヤンゴン、かつての「ラングーン」が、現在では首都ではないことに驚かれる方もいるかもしれない。ミャンマー政府は、2006年に国の中央付近に位置するネピドー（Naypyidaw）に首都を移転したのだ。

そもそも国名の英語表記がビルマ（Burma）からミャンマー（Myanmar）に変更されたのも、1989年と比較的最近のことである。この2つの呼び方は、ともに「ビルマ民族」を意味するビルマ語の、話し言葉「バマー」と、書き言葉「ミャンマー」が元になっている。圧政を敷いていた軍事政権の一方的な国名表記変更には、国内の反発もあった。2007年に発生した僧侶たちによる全国規模のデモも記憶に新しい。

長らく続いた軍事政権に対する内外の批判のなか、2008年に制定された新憲法のもとで2011年にテインセイン氏が大統領となり、状況は大きく変化した。民主化が一気に進んだのである。長年軟禁されていたアウンサンスーチー氏も政治運動に復帰し、国際社会はミャンマーに対する制裁を緩め始めた。今年2014年にはASEAN議長国の大役を受け持ち、ASEAN首脳会議や東アジアサミットを含む280以上の会議を開催するなど、国際イメージも向上している。

ところで、旧首都ヤンゴンのイメージといえば、例外なくシュエダゴン・パゴダの黄金の輝きが挙げられるだろう（左ページ写真）。高さ50メートル近い丘の上に、100メートルほどの黄金の仏塔がそびえている。釈迦の頭髪8本を収めたルビーの容器をさまざまな宝石や黄金で覆い、その上に建立された仏塔が始まりだと伝えられる。その後、歴代の王朝によって規模が拡大され、18世紀後半には今日の姿になった。

筆者は、フォーラム前日の日曜の空き時間を利用して、このシュエダゴン・パゴダを訪問する機会を得た。車が近付くにつれ、その圧倒的な存在感に驚愕する。黄金の輝きが眩しい。しかし、何より印象に残ったのはその輝きではなく、あたかも週末のテーマパークのような人混みの中、裸足にシンプルな巻きスカートのような民族衣装「ロンジー」を着用した多くの人々が熱心に祈る姿であった（写真1、2）。子どもたちも家族や先生に連れられて訪れ、小さな手を合わせ熱心に祈っている。人口の約9割を仏教徒が占めるミャンマーでは、生活の隅々にまで仏教の教えが根付いているという。これが、東アジアでも際立って治安が良いとされる根拠の1つでもあるようだ。

1

2

街を走る乗合いバス

国立図書館（ヤンゴン）

黄金に輝くシュエダゴン・パゴダから4kmほど北東に向かったところに位置するのが、ミャンマーに2つある国立図書館の1つ、ヤンゴン国立図書館である。ヤンゴン市街にあるが、図書館の周囲は木々に囲まれ、木陰が心地よい（写真3）。

ヤンゴンの国立図書館の前身となっているのは、ミャンマーにおける初めての公共図書館といわれるバーナード・フリー図書館（Barnard Free Library）である。同図書館は1883年にチャールズ・バーナード英領ビルマ弁務長官が自身のコレクションを寄贈することにより設立されたものである。

その後ミャンマーが独立すると、1952年に文化省の下に国立図書館が設立され、バーナード・フリー図書館のコレクションの多くは第二次世界大戦の戦禍を免れて国立図書館に引き継がれた。

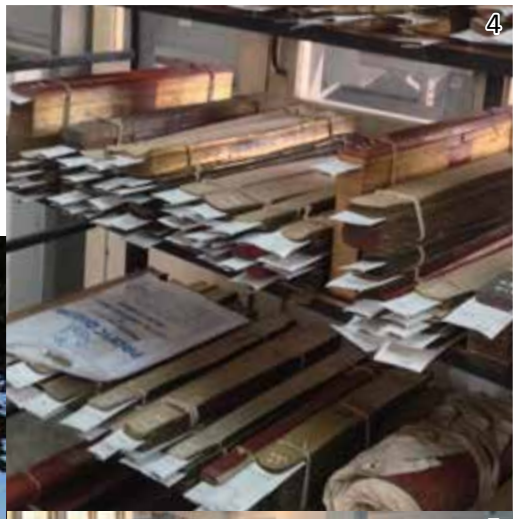
同図書館のビジョンは“To be the national center of intellectual heritage in Myanmar”—ミャンマーにおける知の遺産の国家センターになること、である。

1964年に制定された印刷人・発行人登録法（Printers' and Publishers' Registration Law）により国内出版物を収集しているが、目下のところ国立図書館法がなく法定納本制度も存在していないため、その制定が切望されているという。蔵書は単行本、新聞、雑誌、学位論文、古典籍も含め85万点程度。図書館は一般に広く公開され、読書振興のために展示会や子どものためのプログラム等を実施している。

そのコレクションの中でも目を引いたものの1つが、貝葉文書（Palm leaf manuscripts）である（写真4）。国立図書館の所蔵数は17,564点にのぼる（写真5）。書写のために成形された椰子の葉である貝多羅葉（ばいたらよう）は、広くインド、スリランカ、バングラデシュ、タイ、マレーシア、ラオス、インドネシア等でも使用されていた。今回のフォーラムに参加していた専門家によれば、ミャンマーでは1世紀に仏教が伝来した頃から、この貝多羅葉が使用されていたという。

貝葉文書そのものは1000年程度の寿命をもつというが、保存状態が悪いことなどから、

3


4

5

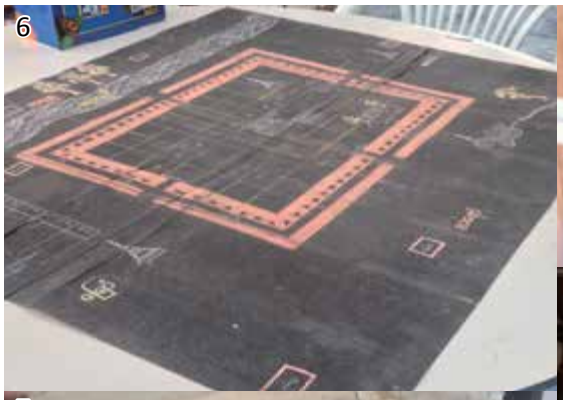
現況では一部の例外を除き、ミャンマーに存在するものはだいたい350年前くらいのものだという。これらの貴重な文献は年月と共に風化・劣化しており、修復や保存対策が急務となっている。

もう1つ目を引かれたのが、折畳み写本：パラバイク（Parabaik または Parabeik）である（写真6～9）。同図書館では2,057点を所蔵している。

パラバイクは手漉きの紙を重ねて糊付したもので、黒と白の2種類がある。歴史的にみれば黒いものが筆記に使用され、白いものが絵画に使用されていたという。現存している黒パラバイク資料は医学、数学、天文学、占星術、歴史、社会経済といったものが多い。このパラバイクも貝葉文書同様、劣化が深刻である。

ミャンマーでは3つの季節が移り替わる。すなわち、夏季、雨季、乾季の3つである。筆者が訪れたのは10月中旬から2月中旬の乾季であり、比較的過ごしやすい季節だった。しかし、夏季は日中40℃を超える日が続き、続く雨季にはバケツをひっくり返したような雨が連日続く。暑さと湿気で資料保存に適した気候とはとてもいえない。1979年にユネスコが発表した報告書"Preservation of Palm-leaf and Parabaik Manuscripts and Plan for Compilation of a Union Catalogue of Manuscripts"には、寺社、図書館で保有している多くの資料が、適切な状態で保管されていないとの指摘がある。35年が経過した現在もなお、状況に変化はないように見受けられた。資料の保存対策がミャンマーでは大きな課題である。

国立図書館の中には小さな子ども向けスペースも用意されていたが、残念ながら訪問したのが平日であったためか、読書を楽しむ子どもたちの姿を見ることはできなかった（写真10）。その頃、子どもたちは制服である白いシャツと緑色のロンジーを着て、学校で勉強していたのだろうか。


6

7

8

9

閲覧室の様子

10

国立図書館（ネピドー）

喧噪のヤンゴンから一路、新しい首都であるネピドーに向かう。「ネピドー」とは、もともと「都」「王の都」を意味する言葉であるという。

ヤンゴン国際空港から国内線のプロペラ機に乗り、北方向におよそ350km、1時間ほどのフライトで到着する（写真11）。東京からであれば秋田や岩手くらいの距離になるだろうか。

ミャンマーの首都がこのネピドーに移ったのは2006年のこと。ヤンゴンとミャンマー第二の都市マンダレーを結ぶ道路の中ほどにピンマナという町があるが、その西側の丘陵地帯を切り開いて、まったく何もない土地に新しい人工都市が建設された。行政区域は約350平方キロメートル、東京23区の半分より少し大きいくらいである。省庁、ホテル、住宅などが広大な土地に点在し、片側3～4車線の幅の広い道路が走っている。電力事情が悪いミャンマーにおいても停電になることが少なく、インターネットの接続も速い。ASEANの一連の国際会議も、この新首都ネピドーで開催されるものが多いのだという。

会議の空き時間を利用し、新しくオープンしたネピドーの国立図書館を訪問する機会を得た。こちらの国立図書館は、2013年5月に開館したばかりであり、旧首都ヤンゴンの国立図書館と並んでミャンマー文化省歴史調査及び図書館部の管轄下に位置付けられる。ヤンゴン国立図書館の支部として設立されたわけではなく、2つの国立図書館は同等であるという。

明るく強い日差しの中、椰子の木の後ろにそびえる白く美しい建物の正面には、National Libraryのくっきりとした青い文字が掲げられている（写真12）。

11

12

13

14

15

16

広大なこの図書館は、今なお工事の途中であり、公開されているのは予定されている3つの建物のうち1つだけであった。約20万点の資料がヤンゴンの国立図書館から移転されてきたという。近隣の省庁に勤務する職員やその家族が利用することを想定しているようだが、見学した際はスタッフのほかにほぼ人の気配がなく、工事中の建物も含め閑散とした印象を受けた（写真13、14）。

館内の子ども図書館は、ヤンゴンの国立図書館よりスペースが広く、色彩がカラフルで全体として子どもが親しみやすい雰囲気を醸し出している（写真15）。

ただ、ここにもやはり子どもの姿はない。そもそも、ネピドーのあらゆる建物の敷地は広大で、人の気配が感じられないのだ。まだまだ人口が少なく、新首都そのものが発展途上なのだろう。

ネピドーの国立図書館の門を出ると、はるか遠くにシュエダゴン・パゴダと同じ形状に作られたウッパータサンティ・パゴダが黄金に輝いているのが見える（写真16）。ヤンゴンのパゴダ（寺院）より約1フィート低いとはいえ、約99メートルの高さがある。2009年3月に完成したという。

人影の少ない広大な地に刺すような日差しが照りつけるネピドーで時を過ごしていると、だんだん人混みと喧噪のヤンゴンが恋しくなってきた。そろそろヤンゴンに戻ることにしよう。

大学中央図書館（ヤンゴン）

再びプロペラ機に乗って、旧首都ヤンゴンに戻る。次に筆者が訪れたのは、ミャンマーでもっとも規模の大きい図書館と言われる大学中央図書館（Universities' Central Library）である（写真17）。

大学中央図書館は、「ミャンマー国内のすべての大学の図書館」として位置付けられており、ヤンゴン大学の敷地内にある。ちなみに、ミャンマーには私立大学は存在せず、国立大学が全国に164校あるという。

17

大学中央図書館は、1960年代に教育制度改革により、ヤンゴン大学付属図書館から分離・独立して、「大学中央図書館」となった。現在の建物は1980年に竣工した比較的新しいものである。主要な機能としては、ミャンマー国内の大学へのサービスのための資料収集がある。貝葉文書を含めヤンゴン大学付属図書館の資料の多くを引き継いでおり、アジア諸国の歴史文化に関する資料の収集に重点を置いている。

その規模の大きさもあって、国内の図書館をリードする存在であり、地下書庫には歴史や文化に関する古文書を含め多くの資料が所蔵されている。

60万点の書籍と16,000点の文書類、そして12,000点の電子書籍を有し、デジタル化も進めているという。

見学に向かうとき、図書館の門のところで一匹の野犬がじっと我々を見つめていた（写真18）。ミャンマーでは野犬が道端をうろついているのを頻繁に見かける。殺生を禁じる仏教のおかげか、野犬たちは自由にのびのびと過ごしているように見える。日差しの強い昼間は、木陰で昼寝をしているようだ。

古文書類の一部がガラスケース内に展示されていた。

18

ヤンゴン大学付属図書館

大学中央図書館の隣に、古いが白く美しい建物が佇んでいる（写真19）。ヤンゴン大学付属図書館である。同図書館は長い歴史をもつ。1931年に設立された時は、そのコレクションの豊富さと美しい建物で、アジアでも有数の大学図書館であったという。第二次大戦での被害を受けて戦後に修復され、現在の姿に落ち着いた。

1階から4階まで、書庫のフロアの床はすべて通気性の良さそうな鉄製の格子からなっている。上階から下を見つめると、その高さに眩暈を起こしそうだ（写真20）。

前述の大学中央図書館に貝葉文書等の古典籍の多くを移管した現在では、欧米の書籍を多く所蔵しており、3,500点の電子書籍のほか、4,000点以上にのぼるヤンゴン大学卒業生の修士・博士論文も保管されている（写真21）。

同行した通訳は、ヤンゴン大学で修士号をとったとのことで、所蔵されている修士論文の背表紙を熱心に眺めて自分の修士論文を探していた。

学生たちが熱心に電子ジャーナル等の閲覧をしている横で、2名の図書館スタッフによって、所蔵資料のデジタル化作業―書籍をスキャンし、その画像を整える作業が進められていた（写真22、23）。

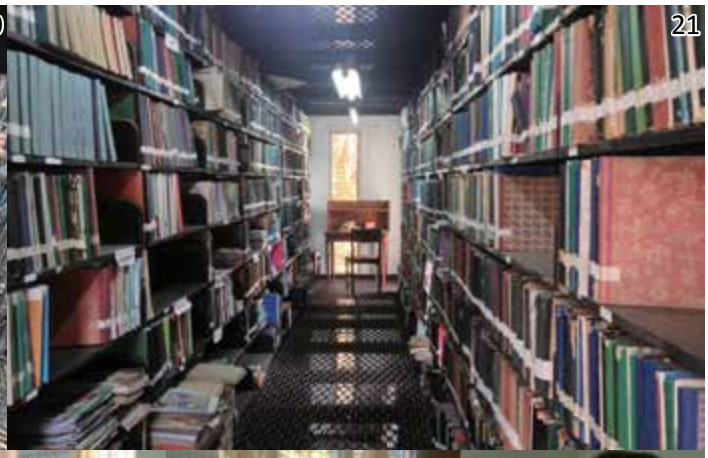
ミャンマーにおける「図書館」

ミャンマーにおいて「図書館」とはどのようなものと認識されているのだろうか。

今回出席したフォーラムの開会式でミャンマー文化省長官が語ったところによれば、ミャンマーにおける図書館の歴史は11世紀にまで遡るという。独立後に国立図書館が設立され、現在では大学図書館、公共図書館、学校図書館、専門図書館等、様々な図書館が

19

20


21

22

23

存在する。米国に本部を置くNPO法人アジア・ファンデーションは、ミャンマーにおける図書館に関する大規模な調査を行い、2014年1月にその結果を発表している。これによれば、社会主義政権時代のスローガンとして「一村一図書館」が掲げられていた経緯もあり、ミャンマーにおける「図書館」は4,868館を超えている。小規模なボランティアベースの図書館が多いが、図書館関係者、行政関係者、図書館利用者、さらに非利用者まで含めて行ったインタビューでは、対象者の97%が、図書館は地域の生活に一定の、あるいは大きな影響があると答えている。

ミャンマー政府も公共図書館を必須の存在と認識し、合計6万以上の各村に図書館の設置を目指しており、図書館にコミュニティにおける情報ハブとしての役割をもたせようとしている。

フォーラムに参加した多くの現地の司書たちを含め、ヤンゴン市内ではスマートフォンを使用する多くの人々を見かけた。会議中、シンガポールの出席者から、情報を得るために「図書館に行く」との発想がない人々に対し「図書館は情報を得られるところだ」という経験を与えるためには、ミャンマー国内でも多くの人が所持するようになっているスマートフォンから利用できるサービスを提供することなどが重要であるとの指摘がなされ、現地の司書たちが頷いて同意を表していたのが印象的だった。ミャンマーでは今、長い閉鎖的な時代を経て、驚くような速さで情報化が進展している。ミャンマーの図書館関係者たちが、古い図書館の枠組みを飛び超えて、日本にいる我々には想像もできないような新しい図書館モデルを作る時代がくるかもしれない。

一方で、ミャンマーの4つの図書館を訪問し、資料保存の重要性について改めて考えさせられた。気候の安定しない発展途上の国において、資料保存は難題である。“By preserving the past, we protect the future of our society” ―今回参加した会議の総括で語られた言葉である。過去の歴史的遺産を保存することによってこそ、我々は社会の未来を守っていける。過去の記憶を保存し未来に繋げていくという国立図書館としての使命を、改めて胸に刻んだ。

★ ★ ★

フォーラムが終わり、旅もそろそろ終わりに近づいた。近代的な趣のヤンゴン国際空港には、夜になると成田行きの直行便を待つ日本人ビジネスマンの姿があちこちにみられる。「アジア最後のフロンティア」には海外からの投資も急増しており、今後は日本企業の進出も加速するだろう。帰りの便は、偏西風の影響もあって6時間半しかかからない。成田に着くのは早朝である。ふと、小学生の頃に父に連れられて観た映画「ビルマの竪琴」を思い出し、この地で戦い亡くなった日本人の魂に思いを馳せながら、ミャンマーの地を発った。

（しらい　きょう
調査及び立法考査局外交防衛課）

ヤンゴン市内にあるチャウダッジーパゴダの巨大な寝釈迦仏。
足の裏には108個の仏教宇宙観図絵が描かれている。

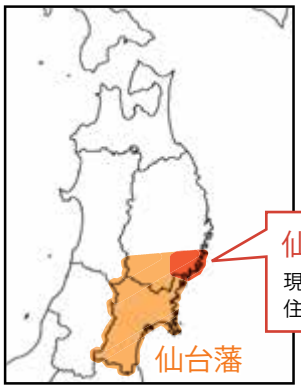
TOPIC

東日本大震災で被災した古文書「吉田家文書」の修復が終了しました

国立国会図書館は、平成 24 年 10 月から、東日本大震災復興支援活動の一環として、岩手県で被災した古文書「吉田家文書」の本格修復を行ってきました。このたび修復作業が終了し、文書は平成 26 年 9 月に岩手県立博物館へ搬入されました。

定留「文政3年」
修復後

修復前



仙台藩気仙郡
現在の岩手県陸前高田市、大船渡市、住田町、釜石市唐丹町に相当。

災害と図書館

日本国内では、地震だけでなく豪雨等による水害も多発しています。国立国会図書館は、保存協力活動の一環として、図書館における災害対応の参考となるよう、水濡れ、カビなどへの対応や日頃の備えに関する情報をまとめて、国立国会図書館ホームページ「資料の保存」でご紹介しています。また、収集書誌部資料保存課では、災害対応に関するご相談を随時受け付けています。

国立国会図書館について > 資料の保存 > 所蔵資料の保存 > 資料防災
http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/preservation/collectioncare/disaster_p.html

吉田家文書とは

吉田家文書は、仙台藩気仙郡で郡内を統括する役職「大肝入（おおきもいり）」を代々務めた吉田家に引き継がれてきた文書類です。江戸時代中期から明治元年までの出来事が詳細に記録されている「定留（じょうどめ）」のほか、索引、絵図などが含まれます。平成元年に岩手県陸前高田市立図書館へ寄託され、平成 7 年に岩手県の有形文化財に指定されました。

経緯

平成 23 年 3 月 11 日、陸前高田市立図書館は東日本大震災の津波により全壊し、所蔵資料の大部分は津波で流出しました。しかし、貴重本庫に収められていた吉田家文書とその関連資料の多くは、海水や土砂に長時間浸かったものの、流出を免れました。救出された文書は岩手県内の文化財救援作業の拠点である岩手県立博物館に運ばれ、砂や泥を落とし、除菌のための洗浄、乾燥などが行われました。

これらの処理に続いて行われた文書の状態調査には、国立国会図書館の職員が参加しました[1]。その結果、カビや細菌の繁殖による汚損が多数あることや、劣化した紙どうしが付着して開けなくなっている箇所があることがわかりました。

その後、岩手県教育委員会から国立国会図書館へ修復の依頼があり、文書を東京本館へ搬送して、収集書誌部資料保存課が修復作業を行うこととしました。

修復作業

国立国会図書館は、吉田家文書を長期に渡り安定的に保存可能な状態にすること、さらに、学術資料として閲覧、展示等の利用が可能な状態にすることを目指して、岩手県立博物館と協議しながら修復を行いました。

文書は袋綴じという形態で、1 枚の紙を半分に折ったもの（丁）が表紙とともに麻ひもで綴じられていま

す。全体の分量は約３万５千丁ありました。まず綴じひもを外し、洗浄、補修、損傷部分の補てん・補強といった一連の処理に耐えられるかどうか、すべての丁の状態を確認し、処置内容を検討しました。

洗浄作業では、水洗いを２回行いました。綴じを外し、広げて洗うことで、丁の内側の汚れや、綴じひも部分に残っていた汚れや砂を落とすことができました。

その後、１丁ごとに損傷部分を修復していきました。劣化のひどい部分は漉きばめ機を使用しました。漉きばめ機は手漉き和紙の製法を応用した機械で、和紙の繊維と水を欠損部に流し込むことで、欠損部を埋めることができます。時代によって使われている紙の厚さや状態がかなり違っていたので、１冊ごとに繊維の配合を少しずつ変え、なるべく元の紙と補修した部分で違和感が出ないよう、色合いや風合いを調整しました。紙が劣化してばらばらに砕けてしまった部分では、岩手県立博物館からお借りした被災前の文書の画像を参照しながら、できる限り元の形に近づけるよう破片を並べて漉きばめを行いました。紙に貼られた付箋などもできる限り元の位置に戻しました。また、紙が付着してしまった部分は、加湿しながらゆっくりと剥がすことで開けるようになりました。

吉田家文書は一般的な和本よりも１冊の厚みがあり、薄いものでも 5cm、厚いものは 15cm あります。最後に綴じ直すときは、通常の綴じ針では長さや強度が足りず、畳針とペンチを使って、やっと綴じることができました。

作業の進捗状況については、ソーシャルネットワーキングサービス Facebook を通じてお知らせしてきました[2]。多くの方に見ていただけたことは、たいへん励みになりました。

作業に当たっては、岩手県立博物館及び陸前高田市立博物館のご協力を得ました。また、増田勝彦氏（昭和女子大学光葉博物館顧問）、大林賢太郎氏（京都造形芸術大学教授）、辰巳大輔氏（株式会社文化財保存）からご助言をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

（収集書誌部資料保存課）

日常業務と並行して、資料保存課職員がローテーションを組んで関わった。

1冊が470丁と分厚かった定留「安永４－６年」。

紙が劣化してばらばらに砕けてしまった部分（右）。被災前の画像（左）

破片を並べた上から不織布で補強し、漉きばめ機で補修。紙の繊維が隙間に入り、不織布をはがすと破片がつながっている。

綴じの作業。畳針をペンチで引っ張る。

保存容器（帙）に入ったところ。帙は外部の専門業者が作成。

岩手県文化財保護審議会の大島晃一委員に作業終了をご確認いただいた。

1　調査は文化庁の東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業（文化財レスキュー事業）として行われた。国立国会図書館はこの事業の構成団体であった。

2　Facebookの内容は当館ホームページに移行。資料の保存＞保存協力＞東日本大震災の被災資料復旧支援＞「吉田家文書」の修復が終了しました　http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/preservation/coop/spt_yoshidake2.html

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、
日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない
国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

外国映画に愛をこめて
外配協の50年

「外配協の50年」編集委員会 編　外国映画輸入配給協会 刊
2012.4　231, 380p　27cm　＜請求記号　KD6-L2＞

映画は娯楽の王者だった。戦後の国産映画第1号として『そよ風』が公開されたのは1945年10月。挿入歌「リンゴの歌」が大ヒットし、戦後復興と重ねられた。外国映画も1945年12月に2本、翌1946年には「君の瞳に乾杯」のセリフで有名な『カサブランカ』を含め、約60本も上映されている。

戦後の外国映画の興行はプロパガンダを兼ねていたこともあり、外国人が代表をしている会社のみに輸入が認められていた。1951年になってようやく日本人による外国映画の輸入が認められ、輸入映画の質向上と配給事業発展を目的として1958年に外国映画配給業者協会が、後継団体として1962年に社団法人外国映画輸入配給協会（以下、外配協）が成立した。本書は外配協の創立50周年を記念して、刊行されたものである。

本書の前半部分は外配協についての資料になっている。戦後から2010年までを年代で3章に分け、関係者の座談会やインタビュー、議事録や簡潔な事業報告のほか、キネマ旬報と興行収入のベストテンを収録している。年ごとのページは当時の世相やニュースも載っているため、時代と配給会社の関係が複層的に読める作りになっている。

座談会ではクォーター制（国産映画保護のため、外国映画の上映数を制限する制度）や買い付けや宣伝時のエピソード、レンタルショップといった他の企業との関係について、ゴダール、『エマニエル夫人』、『プロジェクトA』、『アメリ』といった単語とともにやり取りされている。あまり目にすることのない配給会社側の映画の話に、ページをめくる手が止まらなくなる。

グラビアでは、2012年に開催された東京国立近代美術館フィルムセンターでの展覧会（「ロードショーとスクリーン 外国映画ブームの時代」）で展示されていた絵看板の写真が掲載されており、今はない名画座の姿がしのばれる。

圧巻なのは本書の2/3を占める外国映画封切リストだろう。1945年から2010年までに公開された外国映画の題名と原題、封切日、配給会社、上映時間、製作国、監督名、出演者（主要2名）が挙げられている。これだけの多くの作品が日々新しく上映されているということに驚くと同時に、それらを網羅的にまとめたことに感嘆する。

例えば、製作国に注目して、このリストを眺めてみると、90年代までは製作国に今はなきソ連、西ドイツが混じっていることや、アジアの映画は70年代から香港、80年代から中国、90年代に韓国が増えてくることがわかる。映画リストを通じて、現代史の片鱗がうかがえる。

本書は、映画公開当時の逸話や世相といった質的な情報から、膨大な量のデータまで収録しており、戦後日本の映画を取り巻く状況を調べるのに重宝する1冊であろう。

（調査及び立法考査局国会レファレンス課
松永（まつなが）　しのぶ）

※入手に関するお問い合わせ先
外国映画輸入配給協会　http://www.gaihai.jp/

平成26年度東日本大震災アーカイブシンポジウム「4年目の震災アーカイブの現状と今後の未来（世界）へ繋ぐために」

国立国会図書館は、東北大学災害科学国際研究所との共催により、平成27年1月に東北大学災害科学国際研究所多目的ホールを会場として、東日本大震災アーカイブシンポジウムを開催します。

シンポジウムでは、集められた震災記録の被災地内外における利活用の事例と課題を示し、震災記録や教訓を未来へどのように繋げて行くかについて議論を行います。

参加費は無料です。ぜひご参加ください。

○日　　時　　平成27年1月11日（日）13:00～17:00　（受付：12:30～）

○会　　場　　東北大学災害科学国際研究所 多目的ホール（定員200名）

○プログラム　【基調講演】

筑波大学図書館情報メディア系教授　図書館情報メディア研究科長

杉本重雄氏

【事例報告】

宮城県図書館、多賀城市、日本赤十字社、東松島市図書館、NPO法人20世紀アーカイブ仙台、せんだいメディアテーク、国立国会図書館、東北大学災害科学国際研究所

【パネルディスカッション】

上記基調講演講師、事例報告者

○共　　催　　東北大学災害科学国際研究所

○参 加 費　　無料

○申込方法

12月26日（金）17:00までに、下記「みちのく震録伝」トップページ掲載のシンポジウム案内からリンクしている「参加申込みフォーム」にてお申し込みください。定員に達した時点で受付を終了します。

「みちのく震録伝」（http://shinrokuden.irides.tohoku.ac.jp）

○問合せ先

東北大学災害科学国際研究所　情報管理・社会連携部門　災害アーカイブ研究分野

電話　022-752-2099　メールアドレス　archiveforum@irides.tohoku.ac.jp

※シンポジウムの詳細については、「みちのく震録伝」ホームページをご覧ください。

平成26年度 アジア情報研修

アジア情報の収集・提供に関する知識増進とスキル向上を図り、アジア情報関係機関との連携を進めることを目的として、平成26年度アジア情報研修を実施します。

○日　　時　平成27年2月18日（水）10:00～17:00

○会　　場　国立国会図書館　関西館　第1研修室

○対　　象　各種図書館、調査研究機関、地方公共団体の国際交流部門等に属しており、初級程度の中国語能力と情報検索の基礎知識を持つ方。

＊受講者には、事前課題にご回答いただきます。

○定　　員　20名（原則、1機関につき1名）

○テ ー マ　中国・台湾の諸制度・統計を調べる

○内　　容　（予定）

10:10 - 12:00	実習①　中国・台湾の諸制度（法令・政府情報）を調べる
13:00 - 15:00	実習②　中国・台湾の統計を調べる
15:10 - 16:10	質疑応答、調査方法に関する意見交換
16:20 - 16:50	アジア情報室・書庫見学
16:50 - 17:00	修了証書授与

＊終了後、交流会（会費制、希望者のみ）を予定しています。

○参 加 費　無料。ただし旅費・滞在費等は受講者の負担とします。

○申込方法　電子メールまたはFAXでお申し込みください。タイトル・件名欄に「アジア情報研修申込み」と記載し、本文に次の事項を明記してください。①氏名（ふりがな）、②所属機関・所在地、③所属部署・職名、④電話番号（日中のご連絡先）、⑤電子メールアドレス（又はFAX番号）、⑥交流会参加の有無

○申込期限　平成27年1月16日（金）

申込み数が定員を超えた時点で受付を終了し、調整します。

参加の可否は、平成27年1月23日（金）までにお知らせします。

○申込み・問合せ先

国立国会図書館 関西館 アジア情報課

電子メール　k-azia@ndl.go.jp　FAX　0774（94）9115

電話　0774（98）1371（直通）

平成26年度 法令・議会・官庁資料研修

各図書館における法令・議会・官庁資料に関するレファレンスサービスの向上に資することを目的として、国内の図書館員を対象に法令・議会・官庁資料研修を開催します。

○日　　程　平成27年2月19日（木）、20日（金）

○会　　場　東京本館　新館3階研修室

○対　　象　公共図書館、大学図書館、専門図書館および地方議会図書室の職員などで、日本の法令・議会・官庁資料に関する基礎的な知識の習得を目指す方。

＊応募多数の場合、調整します。あらかじめご了承ください。

＊受講者には、事前調査票に回答していただきます。

○定　　員　30名。1機関からの参加は原則として1名。応募多数の場合、平成22年度以降に当研修に参加した実績がない機関の応募者を優先して、抽選等を行います。

○内　　容　次の2点を主眼として講義と演習を行います。

(1)日本の法令・議会・官庁資料の特徴を理解し、基礎的な知識を身につける。

(2)インターネット上の検索ツールや当館の各種データベースを用い、法令・議会・官庁資料の調査方法を身につける。

○講　　師　大山 礼子氏（駒澤大学）、岩井 美奈氏（参議院法制局）、当館調査及び立法考査局議会官庁資料室・課職員。

○参 加 費　無料。ただし、旅費・滞在費等は受講者の負担となります。

○申込方法　当館ホームページにリンクしている申込みフォーム から、必要事項を入力の上、12月5日（金）17時までにお申し込みください。

○問合せ先　国立国会図書館 関西館 図書館協力課 研修交流係

電子メール　training＠ndl.go.jp

電話　0774（98）1474（直通）　担当：葛馬（かつま）、飯島

※申込方法および研修内容の詳細は、ホームページをご覧ください。

国立国会図書館ホームページ＞図書館員の方へ＞図書館員の研修＞平成26年度の研修＞平成26年度法令・議会・官庁資料研修のご案内

URL　http://www.ndl.go.jp/jp/library/training/guide/1207488_1485.html

お知らせ

年末年始のご利用について

○東京本館・関西館・国際子ども図書館は、次の期間休館いたします。

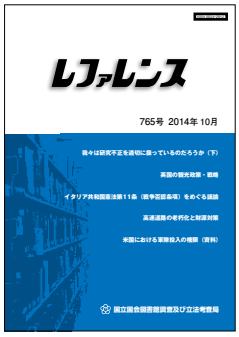
平成26年12月26日（金）～平成27年1月5日（月）

○NDL-OPACでの資料検索、遠隔複写の申込みは、上記の休館期間中も可能です。

この間に申し込まれた複写製品は、1月6日（火）以降に順次発送します。

○来館申込みによる後日郵送複写について、複写製品の年内発送をご希望の場合は、お早めにお申し込みください。複写方法により、年内発送のための最終受付日が異なります。詳しくは、国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）をご覧ください。

新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物



レファレンス　765号　A4　116頁　月刊　1,000円（税別）　発売　日本図書館協会

我々は研究不正を適切に扱っているのだろうか（下）―研究不正規律の反省的検証―

英国の観光政策・戦略―オリンピック開催の経験を踏まえ―

イタリア共和国憲法第11条（戦争否認条項）をめぐる議論

高速道路の老朽化と財源対策―米国の事例を参考に―

米国における軍隊投入の権限（資料）

平成25年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「英米児童文学をめぐる時代と環境」

A4　108頁　年刊　1,700円（税別）　発売　日本図書館協会（ISBN　978-4-87582-766-5）

はじめに

イギリスの歴史物語の流れ

児童文学が描くイギリスの風土と子ども

児童文学におけるセクシュアル・マイノリティ

歴史とジェンダーをめぐって――バーネットの『小公子』、『小公女』、マロの『家なき子』、『家なき娘』の場合

資料紹介「少年少女SF小説全集の興亡」

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14　電話　03（3523）0812

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

No.644 11 November

CONTENTS

02 <Book of the month - from NDL collections>
Japan's image transmitted abroad: Picture books by Hasegawa Takejiro

Feature article: Scenarios and scripts at the National Diet Library

04 Acquiring of scenarios and scripts

06 Interview with screenwriter Nakazono Miho

12 Discovering the history of broadcast programs: Introduction and use of scenarios and scripts

16 Handing down the world of Ichikawa Shinichi: Digital scripts archives and WARP

19 Let's take a tour of the National Diet Library, Tokyo Main Library

22 Travel writing on world libraries: Myanmar

18 <Tidbits of information on NDL>
Air conditioning management of the stacks

30 TOPIC
Completion of the conservation treatment for local documents affected by the Great East Japan Earthquake

32 <Books not commercially available>
Gaikoku eiga ni ai o komete: Gaihaikyō no 50nen

33 <Announcements>
○Symposium on the Great East Japan Earthquake Archive FY2014: Current status of the Great East Japan Earthquake Archive in its fourth year, and actions for the future
○Training program on Asian information FY2014
○Lecture on statutes, parliamentary documents and official publications FY2014
○Library services at the year-end and New Year
○Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

発行所 国立国会図書館
編集責任者 小寺正一
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03（3581）2331（代表）
FAX 03（3597）5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

平成26年11月号（No.644）
平成26年11月20日発行 定価540円
（本体500円）

発売 公益社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03（3523）0812（販売）
FAX 03（3523）0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社 ブルーホップ

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

表紙・本文 中性再生紙使用

「神戸之宵月」
橋口五葉 画　大正９（1920）　１枚　30×48cm
（『橋口五葉版画集』＜請求記号　寄別7-5-2-8＞所収）

国立国会図書館月報

平成26年11月20日発行（毎月1回20日発行 11月号通巻644号）

発売：公益社団法人 日本図書館協会　定価540円（本体500円）

雑誌 03919-11

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。